
その男、レプティリアンにより

椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その男、レプティリアンにより

【Nコード】

N0255Y

【作者名】

椋

【あらすじ】

地球生まれの生粋の日本人（性別女）が不思議な夢を見た後で目を覚ますと……隣人間（たぶん雄）に変身していた。

え?! ええと、こういう場合の対処法って?!

すみません、タイトル変えました。内容には手を入れてないのでお気になさらず楽しんでみてください。

プロローグ

「ああ疲れた……やっぱり会社の近くに家を借りて正解ねえ」

「ここは某所、最近建てられたばかりの新築アパートの一室。

「でも、忙しすぎて布団も干せないのは痛いわ！いい加減日の当たるベランダに干して、カいっぱい布団たたきで愛情込めてバンバンやらないとハウスタストが……でもそんな時は、じゃ〜ん！これよこれ！庶民の味方ファブリーズに最近発売されたお日様の香り」

一人通販を始めた二十代後半と見られるこの女性は、ふんふーんと鼻歌を歌いながら煎餅布団に向かいファブリーズを発射し、そのまま放置して歩き出す。

「ふんふーん……さあスッキリしようじゃあないか私よ！」

しばらくすると、浴室の方から水音が響きだし彼女が入浴中なのだど気付かされる。

「だあ〜さっぱりした！！さて、至福の時間を始めようじゃあないか！！」

色気のないパジャマを着て浴室から飛び出した彼女は一人、喋りつづける。

「つかあ〜美味しい！！この一瞬の為に私は日々頑張っているのよ！！！」

冷蔵庫から出した冷えたビール片手にそう叫ぶ彼女。

そうして、真夜中酔いのまわった彼女は、一人フラフラと煎餅布団へと千鳥足のまま近づき、ばたつと倒れたかと思えば、女性のモノとは思えないほど物凄い高いびきが、真新しいアパートの一室に響き渡った。

「んにゃ〜むにゃむにゃ……。ぐぎよお〜ずいお〜くおおお」

|||||| サイド?????

ああ、めをとじつ

これからおこりうるすべてのことは、まぶたをひらけばきえてしま
うはかないゆめ

まるでらくえんにいるようにいつぶくにつつまれることも

じごくにおとされたかのよつにくつうにさいなまれることもある

どちらにころんでも、まるでげんじつせかいのように、あなたを
なやませることでしょ

けれど、すべてはげんそうであり、くうそうであり、はかないゆめ

ゆめのせかいは、むげんにひろがりを見せ

ゆえにひととよばれるしゅぞくはひとつではなく

ちのうをもついきものはあふれるほどそんざいする

けれど、いのちがそだつにはあまりにもかこくなくんぎょう

あなたがゆめみるせかいのなは 「 「

さえぎるものないこのゆめのなか

ゆらゆらたゆたうあなたのこころは、このゆづだいなるせかいの
うみで

なにをえますか？

第一話 私は鱗人間（雄）！？

夢を、見た気がした。

男でも、女でもない声で、何かを、言われたような、気がした。

私は、まるで小さな子供のように、安心して、真綿に包まれたような暖かな空気の中で、目を……開けた。

「……は」

私は確かに、地球生まれ日本育ちの、正真正銘女のはずだった……

……よね？

目が覚めたら、自分が寝ているのはベットの形をした岩で、起き上がれば目に映るのは岩肌剥き出しの洞窟の壁。

「……なんなの、って」

思わず私は自分の首を自分で鷲掴み、その瞬間視界に入った大きな手にゾツとした。

「なんなの？何の冗談よ！？ねえ？誰がいるんでしょ！！」

こんなところ知らない。こんな狭い、岩をくりぬいただけみたい

な洞窟見たことも来たことも無い。

私は、大企業とは言わないけど、この不景気な時代にしてはそこそこ儲かっている中小企業の事務をして、最近引越したばかりの新築のアパートに住んでいて、それで……今日だって仕事が終わってから寄り道しないで家に帰ってシャワーを浴びてビールを飲んで一服して、フアブリーズのお日様の香りのおかげで良い匂いがするふかふかの布団に潜ってオヤスミ三秒したはずでしょう？！

「こんな、この声は何なの?!それにつこの……」

「この手……」

「これは、う、ろこ?」

嫌に光沢のある綺麗な鱗が、自分の手の甲にびっしりと生えていた。幸いと言って良いのか分からないけど、私はそこまで爬虫類や両生類に抵抗はないので大騒ぎするほどの事じゃないけど、

「だからって、なんで鱗?」

じつと自分の手の甲で堂々と存在を主張する鱗を観察する。冷静に見てれば、色は漆黒で、一枚一枚は薄いのに何枚も何枚も重なり合うように生え揃っているのがわかると、まるで芸術作品でも観ているような気になってしまう。それくらいグラデーションと並び方が美しいのだ。

「自分の身体に生えた鱗が芸術作品つてもなんか複雑だわ」

冷静になると周りもちゃんと見えてくる。まあもしかしたら、実は全然冷静なんかじゃなくて、ただ単に人生最大の危機的状況に脳

みそがアドレナリン大放出しているだけかもだけど！

それでも……私は十代の小娘じゃない。泣いたって喚いたって誰も助けてはくれないことを身を以て知って、痛いほど理解しているいい歳の女だ。

「まずは、状況の整理から……」

はあ、とため息を一つ吐いて、脳内はフル回転。

「まあ、暖かい布団でオヤスミ三秒した所までは良いとして。問題はその後よね……誘拐されて人体実験とか？」

私みたいな中途半端な歳の女を誘拐して鱗人間に改造したところでなんか得があるとも思えないけど……。

「この声も、正にこれこそ重低音よねえ……私って、いま、もしかして」

……この身体、どう考えても女性のそれとは思えないほどガタイが良いし、声は低く、手のひらはゴツゴツしていても大きい。

ああ神様仏様、この際妖怪でもなんでも良いけど、こんな岩肌剥き出しの狭い洞窟みたいな空間に鱗人間（たぶん雄）に変身させられ放置プレイされるほど、私……何か悪いことをしましたでしょうか？

第二話 熊族のトーリヤ

今私は、頭を抱え悩んだり、神秘的な何かにぶつぶつと祈るのは諦め、目が覚めた洞窟を家探し中でございます……。

「ここって、まさか、この身体の持ち主の巣穴？」

とても信じられない。……なんて言うか、この場所はおかしい気がする。ただの洞窟にしては家具が置いてあるし、だけど……この部屋からは住んで居る者の個性みたいなものは一切感じられない。でも、何がおかしいのか、と聞かれるとなんて答えればいいのか分からないけど、そう！この身体の持ち主がどういう性格の持ち主かは知らないし知りたくもない。だけど、この洞窟が誰かの部屋だと考えるには生活臭みたいなものが欠けていて、例えるならどこかのホテルのような……

「……馬鹿らしい、この洞窟のどこがホテルなの？私きつとどうかしてるんだわ」

そうよ、身体だってこんな、鱗だらけだし！なんて自分の脳みそを怪しみだしたその時

コンコン

と、ノックの音が洞窟内に響き渡り

「ひっ……」

私は心臓が止まった と思った……本気で！

「……次から次へと、何だつてのよ!？」

とりあえずは心臓を押さえつつ、何が起きても命だけは助かるように岩ベットの陰に隠れ、苛つきながら耳を澄ませる。

大体、何が飛び出してくるのか知れた者じゃないこの場所も恐ろしいのに、その外側から来訪者が現れたなんて考えたくもない。

「ええーとお、二ヶツトさぁん!! 食事の準備が出来てますがぁ、お部屋と食堂どちらで召し上がられますかぁ?」

どんな恐ろしい生物がドアをぶち破り現れるのか?!と構えていると、部屋の外から聞こえた声はどう考えても幼い子供の声。それもこの洞窟がさっきの仮説通り、宿泊施設だとしたら説明が付く。

「つまり、彼(彼女)は家の仕事を手伝っているココの子供……」

「ううーん、もしかしてまだ寝ているのかなぁ? そうしたら、ご飯どうするんだろぉ? よしっ、おとーさんに聞いてこおようっ」と

小声で自分なりの仮説を固めていると、その子も何やら考えが決まったらしく、この部屋の前から離れようとしているのがわかった。

「っ……」

私は走った。明らかに危険はなさそうな間抜けた声だったし、これを逃したらこの良く分からない怪しい場所でさらに理解したくないこの身体を抱えて生きていく自信もなかった。

*****とある宿屋の看板息子視点*****

初めまして、僕はいろんな種族の人が仲良く暮らしている大きな国「ブリード」の一番大きな町で、一番人気の宿を経営しているおとーさんとおかーさんの息子のトーリヤって言います。この世界には、いろんな種族の人がいっぱいいます。僕は熊族のおとーさんとおかーさんから生まれたので純潔の熊族の雄で、今はよんじゅうなな才くらいだと思う。僕たちは長命種だから何百年も生きるし、あんまり自分の年を一々気にしている人も少ないっておとーさんは言ってたっけ？ちなみに、おとーさんは最後に数えた時さんびゃくごじゅう才くらいだったって。あと、おかーさんには絶対に聞いちゃいけないって何時もは優しいおとーさんが目をひゅってさせて言っ

だから、僕は良い子だし聞かないよって約束したんだ。偉いでしょ？

「トリーヤ、もう夕方だ。ほら、行って来い」

僕は何時もお家のお手伝いをしてる。だってお客さんには色んな人がいるし、優しいお客さんはお菓子をくれたり、女将さんには内緒だよって言ってたまにお小遣いをくれる人もいる。皆、僕が生まれる前からこの宿に泊まりに来ているから僕とも仲良しなんだ。

「うん、でも、僕食べられちゃうかも……」

そうなんだ、いつもは顔見知りのお客さんばかりが泊まる僕の家の宿に、昨日新しい人がふらりと入って来て……。その人すっごくすっごく怖いんだ。

「トリーヤはお客様にそんな顔を見せるつもりなのかい？」

僕はおとーさんとおかーさんに頼まれればいつも喜んでお店を手伝うけど、今回は怖くて、僕なんかきつと丸呑みされちゃうんだって思ったら、お漏らししちゃいそう……。

僕がすっごく怖がっているのに、おかーさんは腰に手を当ててため息を吐いた。でも、きつと優しいおとーさんなら助けてくれる。そう思って僕はおとーさんをつるつるした瞳で見つめてみた。

「……」

「トリーヤ！お父さんをそんな目で見るんじゃないよありません。あんたもさつさと調理場に戻って仕込みして！もうすぐ大酒飲みの客たちがわんさかやってくるって言うのに馬鹿やってんじゃないよ」

おかーさんは怒るととっても怖いので、おとーさんは熊族らしい大きな背中を可能な限り小さく丸めて、僕の顔をちらりと見た後、トボトボと調理場に行ってしまった。おとーさん……僕が食べられなくてもいいの？

「良いかい？宿はお客様あつての商売なんだ。トーリヤもいずれはこの宿を継ぐんだろう？なら新規のお客は大事にしな。あんたの今後の為に言ってるんだよ」

おかーさんはおとーさんを見送ると、僕に合わせて膝を折り、視線を合わせてから諭すように優しく言った。

「そりゃトーリヤの坊主にゃちと早すぎやしないか？」

その声をかけてきたのは、何日も前から宿に宿泊している狐族のリンリンさん

「でもねえ、この子昨日のお客さんを起こしに行くのは嫌だなんて言っもんだから」

僕たちは食堂兼酒場の一階と宿泊客が泊まる二階の宿を繋ぐ階段にいて、ここにいたら昨日のあの人も降りてくるんじゃないかって僕としてはとつてもドキドキしてる。

「ああ、例のあの男かい？」

リンリンさんは眉と眉の間に皺を作って煩わしそうに金色の長い髪をかきあげ、忌々しそうに二階に目をやった。それを見たおかーさんは、困ったものだともたため息を吐いて僕とリンリンさんを見つめる。

「あのねえ、ここは宿屋なんだ。どんな種族のどんな客であろうと、他人に迷惑かけずに金さえ払ってくれるなら最高のサービスを提供する事に変わりはない。それに考えてもご覧？この宿を開いて数百年も経つって言うのに、狐族だの水人族だの有翼人種だの色んな客を持って成して来たけど、あの手の種族は一度だつてこの宿の門をくぐることはなかった。自分の一族の村から出てくる事自体物凄い珍しい出来事だからねえ……今回の旅人の反応が良ければ新規の客がわんさか増えるかもしれない。トーリヤ、あなたの時代も明るいかもしれないよ！」

ぱんつと勢いよく僕の背中を叩いたおかーさんは気分が良さそうににこにこしている。でも僕に力自慢の熊族のおかーさんの力は強すぎて、もしリンリンさんに支えてもらえなかつたらきつと叩かれた拍子に倒れていたと思う。でもそれを言ったらおとーさんに叱られるし、おかーさんが悲しむから内緒にしておく。

「そうは言ってもねえ、トーリヤの坊主は嫌なんだろう？」

「……だつて僕なんかガブリつて食べられちゃう」

リンリンさんはそう言うと、僕の頭を撫でてくれた。やっぱりリンリンさんは優しく、自慢の金色のしっぽもふさふさだし、たまに簡単な毛づくろいの仕方も教えてくれるからだあいすき！

「お馬鹿！確かに見た目は怖いかもしれないけど、あのお客さんだつてきつと悪い人じゃないさ。だいたい普段からお母さんに黙つてお菓子ばかり食べて、ぶくぶくしたあんたを食べたつて甘すぎで吐き出すに決まつてるよ！！さっさとお行き！」

僕がリンリンさんに甘えてすり寄ると、それを見たおかーさんは怒って僕を階段に押し出した。僕、そんなに太ってないよ……おとーさんだつて我慢は良くないつてお菓子作ってくれるし、お客さんも可愛いねつてお菓子くれるし、あれ？僕そんなに食べてたっけ？

おかーさんをあれ以上怒らせたらおとーさんに叱られちゃうから、僕はまああるいしつばをプルプル震わせながら例のお客さんのお部屋にたどり着いた。

「……だいじょぶ、食べられそうになったらリンリンさんと呼ばば飛んで来てくれるつて言ってた」

すうーはあーすうーはあー

「ええーとお、二ケツトさあん！！食事の準備が出来てますがあ、お部屋と食堂どちらで召し上がられますかあ？」

とんとん 扉をたたいても返事はない。

うわあーい！まだ起きてないんだ、これで僕食べられずに済んだ！僕はるるると、来たときは震わせたしつばを楽しくふりふりしながらくるりと扉に背を向けた。瞬間、

「待てっ!」

何のお返事もなかった扉の向こうから鋭い声が聞こえて、おとーさんのおおかーさんにも大声を出されたことのない僕は、ほんの少しちびった……。

「う……おかーさんに叱られる」

第二話 熊族のトーリヤ（後書き）

なんだか、主人公より熊族のトーリヤに力を注いでしまいました
……。

第三話 大熊男と狐美女

私は、とても焦っていた。だって、これを逃したら大事な獲物（情報源）に逃げられちゃうと思つてこつちだつて必死だったのよ？！……なのに、なんで私こんな目に合つてんの？！

「アンタ、いい加減になんか言つたらどうなんだ。それとも……言い訳も出来ないようなことをこの子にしたんじゃないだろうね？！」

目の前には、黄金色の狐人間（たぶん美女）。現在、私は何故か一階の食堂らしき場所で公開尋問（拘束付）されています。

前門の狐、後門の大熊……なんで？

「……（私が何したつて言うのよ?!）」

正直、食堂の椅子に縛り付けられたままで何を言えばいいのかが、私にはわからない。あの時、私はこの宿の子供を引き止めたくて部屋の中をなかば競歩の勢いで進み、ドアを勢い良く開けて、小さな熊人間を見つけた。うん、まさに小熊人間。自分が鱗人間である以上他人をとやかく言う権利は持ち合わせちゃいないが……その子を見た時、実はここが何かのテーマパークや遊園地で、私はきつと夢遊病に罹り各地をさ迷い歩いて保護されたに違いない。きつと、そうなんだと信じたかつたけど、そんな時間も私には許されないらしい。

ぼおつと小熊人間を見つめていたら、彼の穿いていたカボチャパンツみたいな半ズボンがそうと見てわかるほど色が変わり、

「あ……（この小熊、お漏らししたな）」

と思った瞬間。

「キヤー！！たーべーらーれーるー！！リンリンさん！！たーすーけーてー！！」

なんで?!私がいっただい何したよ?!と問うまもなく、小熊くんは足元を濡らしたまま、トコトコときつと彼の全速力で、可愛いしつぽをフリフリしながら廊下を走り去りました。

それから数秒もしないうちに大熊人間（確実に雄）と狐人間（うん、美女ですね）が文字通り飛んで現れたかと思えば連行され、そして現在……。

「俺の子に、何しやがった?ああ?客だから許されると思ったかこの変態野郎っ!!」

その厳つい顔には絶対似合わない可愛いフリフリの白いエプロンを着た大熊男は私の背中に向かい、容赦なく怒鳴ります。私これでも一応成人してますから、こんな公共の場でみっともなく泣き喚いたりしません。もしここが個室とかだったら自分が悪くないとしても……土下座してます。

「……………（怖い怖い怖いどうなってんの?!）」

後ろにいるのに大熊男は威圧感半端ないし、狐美女も……私ずっと睨まれてるし。ああ、そう言えばなんか言わなくちゃいけないのか……でもこの身体、男だよね?私とか言っただ丈夫かな?ただでさえ、今も不審者扱いされてんのに、この空気の中でミスは出来まい。

「……俺は何も。話しかけたら餓鬼が逃げ出したただけだ（俺は話しかけただけで何もしてません。少し尋ねたいことがあったんです。が、お子さんは走り出してしまったので）」

とりあえず怪しまれないためにも男口調で、長々話したりしてボロが出るのは回避したいから、必要なことだけ早口に言い切る。

「っ、俺の子はそんなに礼儀知らずではない！！」

まずい、大熊と小熊は親子だったらしい。怒鳴り声とともに背後からは物凄い重力が……。

「……アンタ、何しにこの王都へ来たんだ？」

その時、狐美女は私を鋭い眼で睨んだまま、低い低い声で聞いてきた。

「大体、アンタら種族は基本的に自分たちの縄張りから出てこない。何があっても周りには不関心で不干涉、悪く言えばただの引きこもり種族だ。まあ、戦闘に特化したアンタらが外に出てくる時は大抵国家間の問題が関わる戦闘要員として高額で雇われた時くらいだし、出て来ないなら来ない方があたしらにとっちゃ助かるがね。それにしても、アンタは一人だ。いくら強いと言ってもたった一人で何しにこの王都へ顔を出したのか……アタシは気になってしょうがないんだが、教えちゃくれないかい？」

……気が遠くなってきた。もう、戦闘に特化した種族って

「……ちっ、言えない様な用事をしに来たってわけかい？」

食堂には、いつの間にかたくさんの人が。しかもなんだ良くわかんない生き物もいるし……もう！！私にどうしろって言うの？！
大熊男は今にも襲い掛かってきそうなオーラをにじみ出させていらつしやるし、狐美女は不愉快そうにキセルをふかしたし、周囲にいる関係ない客たちまで興味心身で身を乗り出して見てるし！！つか誰か助けるよ！！

ああ、田舎にいるお父さん、お母さん、弟の健太、そして思い返せばずいぶんと長い時間を共に過ごした愛犬の壱。

ご無沙汰したまま、二度と会えない世界へと迷い込んだ娘もしくは姉でございます。お元気で居られますでしょうか？気がつけば私は、身体に鱗の生えた生き物（雄）に変身しておりました。ですから、きつと皆様と再会できても気づいてさえもらえはしないでしよう。むしろ通報され、警察どころか研究機関に売り払われたまま二度と太陽を拝めないような地下深くへ嚴重に幽閉コースまっしぐら

のような気もしております。ですので、もしこの場を生き抜くことが出来たなら、私はこの土地に骨を埋めるような事態に相成るやもしれませんので、どうか無事身体が元に戻り、帰途に着けるよう遠いであろう日本の地より祈っていただければ幸いです。

第三話 大熊男と狐美女（後書き）

誰かが読んでいる形跡は一切ございませんが、地道に細々と書き続けております（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0255y/>

その男、レプティリアンにより

2011年11月5日03時15分発行